巻頭言

看護学の発展に向けて

わが国は超高齢社会に突入し、医療は大きく変革しようとしています。病院から在宅へシフトチェンジし、疾病・介護予防が重視され、看護師にはこれまで以上の活躍が期待されています。

看護の質保証、質向上への私たちの覚悟を社会に示すため、2017年にモデルコアカリキュラムが策定され、それに沿った分野別認証評価の実施に向けて、2018年10月に日本看護学教育評価機構が設立されました。さらに今年度、日本看護協会は、20年前に始まった認定看護師制度の再構築へと動き始め、認定看護師教育のカリキュラムの見直しが具体化され、改正案が提出されました。これまで以上に確かなアセスメント力や判断力、高い対応力などが求められ、今後、ますます教育と研究が重要となってくることは間違いありません。

このような看護の潮流を見据え、摂南大学看護学部も次のステージへと発展するための素地作りが必要です。教育においては、“教員が何を教えたか”、ではなく、“学生が何を学んだか”、が重要視され、その学習成果の客観的評価を明らかにすることが求められています。従来の一方通行の授業ではなく、学生自ら考え、討議し、その内容をまとめて発表するという、アクティブラーニングの多様な手法が多くの授業で取り入れられるようになってきました。このような教育のさまざまな工夫は、果たして“効果があるのか”、“将来の看護者としての基盤が培えるのか”、それらを検証していく必要があります。主体的に学ぶ姿勢を身につけ、確かな知識を活用して創造的な看護を実践できるようになるために探求を継続していかなければなりません。

また、実践の科学である看護は、実践の中から疑問を見出し、確かな研究手法を用いてその疑問を明らかにし、結果を現場に還元することが可能です。しかしながら、人間を統合的に捉える看護においては、エビデンスを導き出すことの難しさがあり、エビデンスに基づいた実践とは言い難い状況もまだまだ残っています。それゆえ、看護の質向上と看護学発展への貢献のために研究はなくてはならないものです。

摂南大学看護学研究は、教育に関する研究、看護実践に関する研究だけでなく、新しい試みにチャレンジしている実践報告、研究の基礎となる文献検討なども広く募集しています。この場が将来の看護実践に結びつく研究の萌芽的な機会なることを願っています。

看護学部長・研究科長
鎌田佳奈美